

短歌部門：講評

審査委員：歌人 黒瀬珂瀾

超然文学賞もいよいよ七回目ということで、全国から22篇の応募作があり、今年も様々な挑戦を読ませていただきました。次代を担う、若きみなさんの意欲を見せていただき、頼もしく感じています。

とはいえこの現代、そして未来が安穩としているとは言えません。ロシアによるウクライナ侵攻は終結する予兆もなく、ガザにおけるイスラエルの戦闘行為はついに一年を経て、さらに多くの犠牲者を生んでいます、先日、ノーベル平和賞に日本被団協が選出されました。79年前の原爆の悲劇をいまに語り伝える地道な活動が世界的に評価されてのことで、関係各位の長きにわたる尽力に深い敬意を示したく思います。ですが、なぜ今年を受賞となったのか——。それは、ロシアやイスラエルによる核戦争の可能性が現実味を帯びてきたからに他なりません。つまり、その脅威に対抗するために、原爆は人類共通の敵だというメッセージを送るという、ノーベル委員会の意図があったのだと解することができるでしょう。かように現代は混迷を極め、人間ひとりひとりの命が尊重されないという、苦しい状況です。そんな時代に、なぜ私たちは、短歌という、小さな、ささやかな詩形に出会ったのかを、やはり考えざるを得ません。

もちろん、いくら考えても答えが見つかるわけではありません。しかし、一つ言えるのは、短歌とは暮らしに息づいた感覚から紡ぎだされる、想像力の文芸であり、自分とは違った立場の他の人や自分の外部への想像力の源泉となるということです。

この小さな詩形を通すことで、私たちは、より大きな「外部」という世界と結びつくことができる。ゆえに私たちはこの時代に、この詩形に出会ったのだと、私は信じてやみません。他者や外部を想像し、尊重するという詩的思索を経ることで、私たちはお互いに助け合う道や多様性を学ぶことができる。ひいてはそれが、自分自身の深奥に向き合う手段にもなると思うのです。

今年の短歌部門の最優秀賞には川上真央さんの「私の輪郭」が選ばれました。全体的に世界観が清新で、震えるような感情の表現がありました。なにより、落とすべき歌が見当たりません。それだけ自作を客観視して、良い歌を自選できる力のある作者だということでしょう。

ろう役の台詞が手話の語順ではないと気づいて閉じた脚本

塞がれることのない傷たずさえて「兵士」役らの負ける練習

演劇という場面設定がとてもあざやかです。その設定を通して、「他者」を見つめることを試行している。作者ならではの想像力を感じさせる作品です。私たちはつい、自分の経験だけをもとにして様々な判断をしてしまい、自分以外の存在への思い込みをそのまま放置してしまっている。引用一首目は、それに気づかされる一瞬を巧みに描いたと言えるでしょ

う。二首目は、一種の寓話的表現であろうと思います。演劇の練習風景を描いていながらどこか、現代の世界状況へ思いをいたす視野があるようです。

家までをまわり道するバスに乗る言いつばなしでLINE 途切れて

適切な「ごめん」が言えずクリスピーピザは時々菌茎を刺した

どちらも、他者との関係性を描いています。一首目、まっすぐ家には帰りたくない気持ちだが、一方向的なコミュニケーションのあり方とうまくあいまって表現されています。二首目、素直に謝れない微妙な感情が、「クリスピーピザ」というアイテムを活用することで、身体性を伴って浮かびあげられています。菌茎のかすかな痛みが、そのまま心の痛みにつながるのでしょう。現代短歌をよく学んでこられたのだと思いますが、自己を客観視し、自己と他者を並べ置く想像力が、短歌を通して鍛えてこられたことが、この作者には大切なのだろうと思います。今後のご健詠をお祈りするとともに、川上さんには、広く社会を見渡す道を歩んで行ってほしいと思います。

優秀賞の一作目には市嶋真ノ介さんの「生き物の国」が選ばれました。

様々な生き物を題材とし、空想を広げる一連でした。ともかく発想の良さ、アイデアの豊富さに注目しました。普段から様々な情報を摂取することに気を付けている作者なのでしょう。その一方で、いくつかの比喻表現にやや常套的なものがあり、そこが惜しかったのですが、一つのテーマで押し切る胆力のある作者です。

猫背だと叱られたとき君は言う蛇の背骨は優雅であると

水槽に囚われてなお柔らかく静かに学ぶ蛸でありたい

このユーモア感覚に、のびやかな詩情を感じます。引用一首目の切り返しの見事さ。猫から蛇への転換の鮮やかさに注目しました。二首目も「柔らかく」が、単に「蛸」だけでなく「学ぶ」にもかかってゆく面白さがあります。

コンドルを研いだ異国の風があり街には凧いだ他人事がある

この南米ペルーの空を思わせる爽快な空間把握と、対照的に描かれる自分の住む街の描写。風が鳥を「研ぐ」という表現も秀逸です。独自の作家性を持った作者でしょう、

もう一作の優秀賞には山田ひなのさんの「贖罪の雨」が入りました。大変な意欲作です。少々思いが強すぎて直情的になった歌もありはしますが、孤独感を追い求めたその作品には、時代精神が満ちています。

深海のような街並み土という漢字は地面に立った十字架

この一首には注目しました。いわゆる「見立ての歌」で、確かに「土」という字は地面に十字架が立っているように見える。そして、この歌が単なる「面白い気づき」の歌にとどまっていないのは、下句の情感を支える上句の具体性です。深海のように静まり返り、光のとぼしい街の風景がそのまま作者の心象風景となっているのです。

君を待つ群数列を解く音がやけに響いた生徒会室

短夜の雨を聞きつつリュウグウノツカイを抱いて微睡へ行く

一首目、一人数学の問題を解きつつ君を待つ、狭い部屋。そのわずかな時間が長い時の流れに感じられる。二首目の静けさの表現も良いです。今後の研鑽を期待しています、

佳作入選のみなさんの作品も紹介します、まずは昆野永遠さんの「対になって」。

コーン茶のとうもろこしは太陽の寿命のことなど知らずに育つ

妹は海に似ている私から多くを奪ったくせにのんきで

他者の描き方や妹さんとの関係性がよく、比喻も斬新でした。ただし、ちょっと作者自身が面白がりすぎているきらいもあったのでしょうか。引用二首目の「多くを奪った」という表現は、もしかしたら、東日本大震災による津波のイメージも含んでいるのかもしれないと感じました。

次に佐藤みちるさんの「水と棲む」。

トンネルを抜けた先には海がある もう靴下は脱ぎ捨てておく

玄関に置かれたビニール袋には鈴木さん似のトマトが五つ

全体的に歌が繊細で、情景がありありと想像できます。また、津波の被災地の景を詠もうという意欲も伝わってきました。問題は、それを実体験者がどう読むか、様々な視点を模索してみてください。昆野さんと佐藤さん、お二人とも同じ気仙沼高校なんですね、どうか切磋琢磨して、来年も挑戦してほしいです。

そして、森岡千尋さんの「ちいさな春」。

明日には私の形になっていく上履きはまだちょっと他人事

絡まったイヤホンつたい通信は北極星と二人きりの朝

眼前の小さな世界を大切に見つめる一連で、さりげない詩情を掬い取る姿勢が良いと思いました。全体的にアイテム、素材の取捨選択が巧みでした。一方で、もう少し大きな景、遠い対象への視線も大切にしてほしい。今後さらに上達するだろう作者です。次回作をお待ちしています。

私たちはこの時代に、短歌に出会いました。小説や詩、俳句、戯曲など、その他のジャンルにも親しんでいる人も大勢いるでしょうが、短歌作品を創作する時は、短歌ならではの表現に挑戦してみてください。たとえば、自分で結論を述べ切ってしまうのではなく、読者との呼応のなかに作品を託すという、短歌的な方法論があります。そういった模索こそが、自分の中にある「他者の視線」を喚起させるきっかけにあると思うのです。次回も楽しみにしています。